

## 課題

「教育社会学」の授業で取り上げられたテーマや内容の中から 1 つを選び、それに関してレポートを書いて下さい。字数は 400 字～1000 字程度（それ以上であっても構わない）。

今回の授業内容は、第 1 回 教育社会学とは（その 1）、第 2 回 教育社会学とは（その 2）、第 3 回 子どもの社会化、家庭教育、第 4 回 学校の社会学、第 5 回 教育内容の社会学「主体的、対話的で深い学び」、第 6 回 教育と選抜、第 7 回 教育と差別、第 8 回 いじめについて考える、第 9 回 学校における「安全教育」、第 10 回 他の受講者のコメントを読む、第 11 回 生徒文化の社会学、第 12 回 ジェンダーと教育、第 13 回 地域社会と教育です。（レポートの内容は、上記以外でも構わない）。

## 解答例 （57 名中 24 名の掲載）

A

この授業で学んだことの感想—私は教育社会学を通して教育はただ知識をつけ学んでいくのではなく、社会と深く結びついていることに気がきました。第 3 回目の授業では、子どもにとって家庭は最初の社会であり、親からの教育が人間性を育て、家庭とは社会に出る第一歩の影響を与える重要な教育と学びました。第 4 回目の授業では家庭での教育だけでなく、学校教育も子どもが社会へ行けるために重要な教育が行われていることを学びました。家庭と学校では異なる教育がされていますが子どもの成長に密接な関わりがあると気づかされました。

他にも人種差別について子どもたちに教えなければならない内容を学び社会では人種差別があるということを子どもたちに教えておかなければならないと感じました。差別を経験させることはなぜ差別をしてはいけないのかと理解させることができ、相手の立場になって物事を考えられる力を身につけるための教育と学びました。第 8 回のいじめについては現在もなくなる問題であり学校の勉強だけでなく子どもたちにこの問題を教育する必要があると考えられる授業でした。

ジェンダーの内容ではセックスとジェンダーは必ずしも一致はせず男らしさ女らしさを押し付けず、考えを尊重すべきと子どもに教えなければならない内容と学びました。柔軟な考えを持たせることで自分らしくいられる社会を目指していく要素にもなると考えました。13 回の内容は地域社会についてで、変化の多い社会では、地域にとどまらず広い視野を持つ必要があると考えられる授業でした。子どもたちにも変化に対応できる力を身につけたいと私は思いました。

これらのように教育社会学では、教育とはただ知識をつけさせることではなく、社会で生きていくために必要な力を学ばせることを知りました。

## B

この教育社会学を通して、たくさんのことを学び、教師になるうえでの広い視野を少し身につけたと思う。私は、第9回から第10回にかけて行った学校における「安全教育」が特に印象に残っている。私は元々、教育において安全教育を大切にしていきたいと考えており、その考えを更に深めることの出来る時間だったと思う。3.11の時、私は小学校入学前で断片的な記憶しか残っていない。ということは、私より歳下の世代にはほぼ記憶になかったり、そもそも知らなかったりするのだと思う。震災はそう何度も起こらないし起こって欲しくは無いが、経験がない分、危機感のようなものは大人より少ないかもしれない。昨年の能登半島地震で地震の恐ろしさを知ることはあったかもしれないが、場所が限定的であったので身をもって体感したわけではない。安全教育のために全員が恐怖を体感しなくてはならないというわけでは無いが、恐怖があるから同じ悲劇を繰り返さないために人は対策をする。それがこれからの世代にはないので、いかに学校という場で安全教育を行うかがとても重要になってくる。私は時々自分でYouTubeを使い当時のことを調べることが多い。だがしかし、少しショックな映像もあるため子供たちに伝えるにはどれが適切なのかを選ぶ必要があると思った。中学校や高校で行った避難訓練は正直に言うところと全くためにならず役にも立たないものだったと思う。一人ひとりに目的意識を持たせ、なんのために行って、どうすれば良いのかというふうに明確なビジョンが必要である。ただ、学ぶのではなくどうしたらより効果的なのかという面で改めて考えさせられた。

## C

「安全教育」-教育社会学の講義をこれまで受けてきて、自分の中で一番印象に残ったものが、学校における安全教育だったため、今回のレポートは、そのことについて書いていく。

私が、学校における安全教育と聞いて一番に思いついたことは、地震や火事など想定した避難訓練である。これ以外にどんなことが安全教育に該当するのかがわからなかった。そこで、学校における安全教育について調べてみると、「児童生徒等が安全に関する資質・能力を教科等横断的な視点で確実に育むことができるよう、自助、公助、共助の視点を適切に取り入れながら、地域の特性や児童生徒等の実情に応じて、各教科等の安全に関する内容のつながりを整理し教育課程を編成することが重要である。」ということが書かれている。教科等横断的な、と書かれているが、3年の社会科で町探検を行い、安全なところと危険なところを地図にまとめる授業も安全教育に当てはまるのかなと、調べたことから考えることができた。他にも自分が経験したことを思い出してみると、災害について学習する科目はもちろん、いじめや人の気持ちについて学習する道徳なんかも該当すると思う。この安全教育は、児童生徒が自らを守れるようにするための教育であるため、体外の危険だけでなく、精神的なことにも該当するだろう。心に傷を負ってしまった児童生徒の対応は教師だけでは難しい場合もある。そのために、学校にはスクールカウンセラーが設置されていたり、専門機関への相談も受け付けている。こういった相談できる場所があることをアナウンスすることも

安全教育といえるのではないだろうか。

学校における安全教育について、教師一人ではなしえることができないことばかりで、誰かの協力がなければ難しいことである。そのため、教師だけでなく、保護者や地域の方とも協力して行っていく必要がある。

#### D

私は、今回の教育社会学全体の講義を通した上でその中でも特に人材選抜の話が印象に残っている。

昨今「お受験」や中学受験の影響を受け、学業成績の重要度が小学校でも高まっている。私は子どもの未来を決定づけるものが個人の能力や努力次第で決まるということは良い事だと考えている。しかし、この変化により、学歴社会が形成され、学歴が高いことが職業に就くための条件となり、学歴が高い人が高い収入を得る仕組みに対しては問題意識を抱かざるを得ない。

社会では、学歴獲得競争が激化する中で、選抜や競争は全ての人に公平かつ厳正に行われるべきである。

しかし、親の地位や収入などが影響を与えないといった環境は本当に可能なのだろうか。教育の中で今日には学力においては他の能力に比べて受験、就職、と社会の節目や転換点に重視されている。

人材選抜のためには、学業成績が重要な指標となるが、成績が良い子どもは自信を持ち、成績が悪い子どもは自信を失いやすい。こうした教育における選抜や競争が必要なのかという疑問が講義では触れられていた。

競争をどのように行うべきか、教えるべきか、

競争意識を促すべきか、否かは私は結論を出すことが出来なかった。

人間の能力には非認知能力というものがあり、それらが実際に目に見える能力である認知能力と比べて割合が多いことは既に分かっている。

また、成績評価には絶対評価と相対評価があり、競争の意義や指導方法に深く関わっているのも今回学んだ。

学業だけでなく、スポーツにおいても競争は存在し、目標を勝利に設定することが多い。このように、競争に対する意識や行動をどう考えるかは、教育における重要な課題であると私も強く思い、もっと深く考えていきたいと思った。

#### E

教育は、社会的平等を実現するための重要な手段である一方で、差別を助長する場ともなり得る。本来、教育はすべての人がその潜在能力を最大限に発揮できる機会を提供するべきものである。しかし、現実には性別、経済状況、民族、障害の有無といった個人の属性によって不平等が生じることがある。たとえば、家庭の経済状況により、学習環境や進学機会が制

約されるケースは少なくない。貧困層の子どもは塾や習い事に通えず、教育格差が拡大したり、学校での制度や文化が特定の性別役割や社会的期待に基づいて設計されている場合、ジェンダーによる差別が温存される可能性がある。理系分野への進学が男性に偏る現象や、女子生徒への特定の服装規定の強要などはその例である。さらに、民族的マイノリティや外国籍の生徒が、言語や文化の違いによって不利な立場に置かれる問題もある。特に日本では、在日外国人や移民の子どもたちが、日本語教育の支援を十分に受けられず、学力の面で取り残されることが課題となっている。同様に、障害のある子どもがインクルーシブ教育を受けられず、特別支援学校への分離が進むケースも多く見られる

このような差別や格差を解消するためには、教育機会を平等に保障する制度設計とともに、多様性を尊重する文化の形成が必要である。また多文化共生やジェンダー平等の意識を高める教育が重要であり、すべての子どもが個性を尊重されながら成長できる環境を整えるべきである。教育は、差別をなくし、持続可能な社会を築く上で大きな鍵を握っていると私は考える。そのためには、現状を直視し、すべての人が公平に学ぶ権利を享受できる社会を目指していくことが重要である。

## F

教育社会学の授業で取り上げられたテーマの中から、「教育と差別」について考察します。

このテーマは、教育現場における公平性や平等性を考える上で非常に重要です。

教育における差別は、多様な形で現れます。例えば、性別、社会的経済的背景、民族、宗教、障害の有無などに基づく差別が存在します。これらの差別は、子どもたちの学習意欲や自己肯定感に悪影響を及ぼし、最終的には社会全体の不平等を助長する可能性があります。

特に、社会的経済的背景による教育格差は深刻な問題です。経済的に困難な家庭の子どもたちは、十分な学習支援を受けられない場合が多く、学業成績や進学率において不利な立場に置かれがちです。このような状況は、世代間の貧困の連鎖を引き起こす要因となります。

また、ジェンダーに基づく差別も依然として存在します。例えば、理数系科目における女性の参加が制限される文化的な偏見や、家庭科や体育などの科目での性別役割の固定観念などが挙げられます。これらは、子どもたちの将来の職業選択や自己認識に影響を及ぼします。これらの差別を解消するためには、教育現場での意識改革が必要です。教員は、自身の偏見や先入観を見直し、多様な背景を持つ子どもたちに対して公平な教育を提供する責任があります。また、カリキュラムや教材の中で多様性を尊重し、すべての子どもたちが自分の価値を認識できるような環境を整えることが重要です。

さらに、政策レベルでの支援も不可欠です。経済的に困難な家庭の子どもたちへの奨学金や学習支援プログラムの充実、障害を持つ子どもたちへのインクルーシブ教育の推進など、具体的な施策を講じることで、教育における差別を減らすことができます。

教育は、社会の未来を担う人材を育成する重要な役割を持っています。そのため、教育現場での差別を解消し、すべての子どもたちが平等に学び成長できる環境を整えることは、社会

全体の発展と公平性の実現に直結します。

参考文献として、『現代の教育課題を読み解く』（中央教育研究所研究報告 NO103、2024.12.25）を参照しました。この報告書では、教育における多様な課題が取り上げられており、特に教育格差や多文化教育に関する章が本テーマと関連しています。

以上の考察を通じて、教育と差別の問題は多角的な視点から検討する必要があり、教育現場、政策立案者、そして社会全体が協力して取り組むべき課題であると再認識しました。

## G

私が特に印象に残っていると思う授業は第 7 回 教育と差別です。理由を考えてまず初めに思ったのがインパクトの強さです。授業として実験を子供たちに行い身をもって体感させる。かなり効果的だと思いますが、非人道的な授業だと思いました。しかし、個人の努力でどうしようもない条件で生徒たちを二つのグループに分け普段通りの授業が始まりますが、エリオット先生は青い目の生徒が正解すれば青い目だからさすがねと言いき、茶色い目の子が間違えるとやっぱり茶色い目だから仕方ないなどと、わざと差をつけた対応をし、それにもかかわらず実験を終えた子ども達は大人のなってもエリオット先生に感謝されているということが何より意外でした。そして私は、今の時代に必要な教育と思いました。それは、この授業に実体験があったからです。子どもたちにとって一生役立つ、すぐに失われない本当の知識を身につける方法は、実体験や経験に勝るものはないと思います。差別はやめましようとして伝えるだけの授業であれば、子供たちは頭では差別はダメと表面的に理解はしていても、差別された人の気持ちやどのような形で差別が発生していくのかという本質的な部分は理解できないのではないかと思います。将来教師になった際は親御さんにもし了承がとれれば行いたいと思いました。そしてそれがかなうような学級経営をしたいです。

## H

私が教育社会学の授業を受けた中で最も印象に残っている内容は第 7 回の教育と差別だ。青い目茶色い目の動画では子どもたちに差別の知識をつけてもらうために授業の中で差別を体験させるといったものだった。この動画でとても印象的だったのは差別を取り入れた授業を行った翌日に子ども同士で喧嘩が起きたことだ。その子どもは目の色で呼ばれ、殴ってしまったという。目の色で呼ばれることをバカと言われているみたいと言ったのだ。差別を意識するとこんなにも子どもたちの生活や友達との接し方に違いが出るのかと驚いた。そしてこの取り組みでは途中で差別をする側と受ける側を変更するというところを行っている。子どもたちが差別を受けていなく、自分たちの方が優れていると感じているときは問題を解くスピードが速くなっているというのも差別が生み出してしまう嫌な要素だと感じた。そして最後にエリオット先生は今自分たちが行っていたのが差別だということを子どもたちに強く認識させていた。エリオット先生の子どもに差別を体験させるという授業は実践的で幼い子どもたちの意識を変えて、差別という存在をなくしていくのにとっても意味のある取

り組みだと感じた。何より私自身もエリオット先生の差別をなくしていくにはまずは教育を根本から変えていく必要があるという思想に強く共感することができた。現在やこれから先の日本では国際化が進みクラスに外国の子どもやハーフの子どもが何人いても不思議ではない状況になる。そのため、子どもに差別意識を生ませない教育を徹底すると共に、自分自身も絶対に差別を持つことがないようにし、どのような子どもでも平等に接していけるような教師を目指していきたいと考える。

## I

今回の授業を通じて、教育と差別について深く考える機会を得ました。特に印象的だったのは、「茶色い目の子と青い目の子で分けて差別させる」という動画でした。この実験では、目の色という無意味な基準を使って、子どもたちに優越感と劣等感を抱かせることができた点が非常に衝撃的でした。教育現場における教師の影響力の大きさを改めて認識し、教育者としての責任の重要性を感じました。無意識のうちに差別を助長してしまうことがあるという点に、少し恐怖感がありました。

実験の結果、差別される側の子どもたちは、自己評価が低くなるだけでなく、学習意欲や社会的な関係に悪影響を与えることがわかりました。これにより、教育における公平性の欠如が子どもたちの将来にどれほど大きな影響を与えるかを実感しました。教育の場での差別は、学力の差だけでなく、心の成長にも関わる重要な問題だと感じました。

また、この授業を通じて、差別を乗り越えるための教育がいかに重要であるかも学びました。差別を無くすためには、教育者が意識的に公平で包摂的な環境を提供することが不可欠です。子どもたちに多様性を尊重し、他者との違いを受け入れる力を育むことが、社会的な分断を防ぐために必要だと強く感じました。そのためには、感情や価値観を育む教育が非常に重要だと実感しました。学問だけではなく、社会性や共感を養う教育が、差別を乗り越える力となると考えます。

教育現場で差別をなくすためには、教師だけでなく、家庭や地域社会も協力して多様性を尊重する文化を育てることが必要だと感じました。学校が多様性を尊重し、子どもたちが異なる背景を持つ他者と共存する力を養う場となることが、差別を防ぐための第一歩だと考えています。

今回の授業を受けて、教育の持つ力を改めて実感し、教育者としての責任の重さを痛感しました。今後は、教育現場で公平で包摂的な環境を作り、多様性を尊重する教育を実践していきたいと強く思うようになりました。

## J

教育における平等と差別の排除は、社会の健全な発展のために極めて重要なテーマである。本稿では、教育における平等の重要性、差別の現状、そして国際化が進む中での課題について考察する。

アメリカ社会では、依然として人種差別が深刻な問題となっている。一方で、日本では日常的に差別を感じる機会は少ないかもしれない。しかし、社会が国際化していく中で、日本も差別と無縁ではいられなくなっている。例えば、千葉市の高浜小学校では、生徒の4割以上が外国籍であり、特に中国籍の子どもが多いという事例が示されている。このような現状は、日本の学校における多様性が増加していることを象徴している。

多文化共生社会において、教育の場では外国籍の子どもたちを差別なく受け入れることが求められる。しかし、平等を実現する際には、「形式的な平等」と「実質的な平等」の違いに留意する必要がある。形式的な平等とは、すべての子どもを同じように扱うことを指すが、それだけでは十分ではない。一人ひとりの背景やニーズを理解し、必要に応じて支援や配慮を行うことで、初めて実質的な平等が達成される。

差別は、人種や国籍だけでなく、性別、出身地、社会的階層、地域など、さまざまな属性の違いから生じる可能性がある。そのため、教育者には多様性を尊重する姿勢が求められる。また、子どもたちが差別のない環境で学び、成長できるよう、教育の場での取り組みが必要である。

教員が差別のない教育を実現するためには、子どもたち一人ひとりの背景を理解し、個別のニーズに応じた支援を行うことが重要である。また、多様性を尊重する価値観を子どもたちに教え、自らが無意識の偏見に気付き、それを克服する努力を続けることが求められる。教育において平等を実現することは、未来の社会をより良くする基盤を築くことにつながる。差別のない教育環境を整備するためには、形式的な平等にとどまらず、実質的な平等を追求することが不可欠である。そして、教員はその実現において重要な役割を果たす。国際化が進む現代において、多様な背景を持つ子どもたちが安心して学べる環境を整えることが、これからの教育に求められる課題である。

K

私が教育社会学で1番印象に残ったテーマは、第8回目のテーマの「いじめについて考える」である。現在、学校におけるいじめの件数が年々多く発生している。私は第8回目の課題レポートで、児童生徒の間で起こるいじめは、学校で過ごす環境によって頻繁に起こってしまうのではないかと述べた。学校で過ごす環境とは具体的に、学校集団の特質である、「半親密性」や、「出入り不自由な集団」などによって起こりやすいと学び、環境によっての影響が大きいのではないかと思ったからである。これに加えて、いじめが起こってしまう原因には、「他者との認知の歪み」や、「集団のノリ・空気」などが挙げられる。特に、「集団のノリ・空気」は、ノリや空気についていけないと集団から仲間はずれにされるかもしれないと思い込んでしまい、素直に自分の気持ちが言い出せないという状態に陥ってしまう可能性がある。周りはこれらの原因に気づかず、いつの間にかいじめが起こってしまうという点が問題であると思う。では、いじめが頻繁に起こるのを防ぐために、教師や児童生徒にできることは何か。まず教師は、日々多くの児童生徒と関わる中で、一人ひとりの児童生徒をよく観

察して関わっていくことが大切である。先程述べた原因(認知の歪み、ノリ・空気)は、教師から見えないところで起こりやすいため、児童生徒をよく観察し、変化に気づくことがいじめを未然に防ぐうちの1つの方法であると考え。また、他の方法として道徳の授業等で、いじめが起こりそうな場面を描いた教材を扱い、児童生徒が自分の考えを話し合う場をつくることも必要であると考え。学校や日常での生活で起こりそうな場面がいじめに繋がってしまうことがあると理解し、自分の発言や行動を振り返させながら、いじめについて授業内でも教えていくべきであると考え。次に児童生徒は、普段の生活のなかで相手の気持ちを考えて発言や行動をすることが必要である。自分は悪意がなくても、無自覚に他人を傷つけてしまう場面は多い。このような場面を増やさないためには、相手の気持ちを考えること、学校集団という大きな集団のなかで、自分の役割や責任を自覚しながら生活をしていくことが大切であると考え。最後に、いじめを未然に防ぐために教師や児童生徒ができることは何かを考えてきたが、教師や児童生徒に限らず、学校全体でいじめをなくすということ強く表明することも必要である。児童生徒がよりよく生活できるように、一人ひとりがいじめは起こってはならないという考えや意識をもったり、学校全体でいじめ未然防止への取り組みを積極的に行っていくべきであると考え。

## L

学校教育では、不登校やいじめの問題が引き続き増加している。「学級集団の特質」から、いじめについて考えてみるといじめの発生しやすい集団的な特性というものがある。

1つは、「半親密性」。つまり親密でも疎遠でもない「半親密」な集団で、いじめは発生しやすい。親密な家族ではいじめは発生しない、電車やバスは、疎遠な関係の人が乗っているのでいじめは起こらない。学級集団は、制度的に作られた疎遠なものにも関わらず、「みんな仲良く」と親密性が強調される半親密の集団である。

2つ目は、「出入り不自由な集団」でいじめが発生する。学級は、そこが自分に合わなくても他に変わることができない出入りが不自由な集団である。大学の授業や趣味のグループは嫌になればその集団から抜ければよい。したがっていじめは発生しない。

このように、学級集団は「半親密」「出入り不自由」といういじめの発生の温床となる特質を備えている。これを解消するためには、選択授業の導入、複数クラス合同授業など、学級の閉鎖性を緩和するような方策が考えられる。

## M

小学校でのいじめは、よくニュースでも話題になる大きな問題です。いじめは、単に子ども同士のトラブルではなく、学校という社会の中で起こる現象の一つとして考えられます。例えば、機能主義の考え方では、学校は勉強を教えるだけでなく、ルールやマナーを学ぶ場所でもあります。しかし、クラスには先生が決めたルールとは別に、子どもたちの間でできる「暗黙のルール」のようなものが存在します。その中で、「この子はいじってもいい」「この



子は強いから偉い」といった関係が生まれ、いじめにつながる場合があります。また、社会には競争があり、学校でも成績や運動、友達の多さなどで競争が起こります。このような競争の中で、自分が上に立つために、弱い子をいじめることもあります。さらに、家庭環境の違いによって「なんとなく貧乏そう」「育ちが違う」といった理由でいじめられることもあります。これは、社会の格差が学校の中にも影響を与えている例だと思います。このように、いじめは子どもたちの性格や行動だけの問題ではなく、学校という環境や社会の仕組みが関係していると思います。そのため、いじめをなくすためには、個人の意識を変えるだけでなく、学校全体のルールや教育のあり方を見直していくことが大切だと思いました。

## N

いじめは、小学校から高校まであらゆる学校で発生する深刻な社会問題であると考えて、特に小学校では、子どもたちの社会性が未発達であると考えた。本レポートでは、小学校におけるいじめの発生原因と、その課題を解決するための対策について考察しました。

小学校で発生するいじめが発生する背景には、さまざまな要因が絡み合っていることがわかった。

1つ目に、小学生はまだ社会的なルールや相手の気持ちを深く理解する能力が発展途上である。そのため、相手を傷つける言動を無意識に行ったり、集団心理に流されてしまうことだ。

2つ目に、子どもたちは、仲間を作りたがる一方で、「異なるもの」を排除しようとする傾向がある。例えば、外見や性格が他の子どもと違う場合、その子をからかうことがいじめにつながることもある。

最後に、家庭環境もいじめの要因となる。親から厳しく叱責される子どもは、学校でそのストレスを他の子に向けてことがある。また、愛情不足や過保護な家庭では、子どもが他者との関わり方をうまく学べず、トラブルを起こしやすくなることが考えられる。

以上観点から、いじめを未然に防ぐためにも子どもの行動をよく観察し、小さな変化にも気づく力がいじめを防ぐことだと学んだ。

## O

いじめは個人の心理的問題だけでなく、学級の特性や社会のあり方とも関係している。本講義では、「思いやり」やその教育という心理や教育のミクロな側面と集団的側面を中心に取り上げる。

まず、「思いやり」の発達について、人はどのようにして他者の気持ちを理解し、利他主義的な心情を育むのが重要視される。家庭や学校の教育の中で特に道徳教育で「思いやり教育」を実施すれば、いじめの減少につながると考えられる。

次に、学級集団の特性として、いじめが発生しやすい集団条件がある。第一に「半親密性」があり、学級は完全に親密でもなく、疎遠でもない親密性が強調される半親密の集団なため、いじめが起こりやすい。第二に「出入り不自由な集団」であることが問題で、学級は自由に

抜け出せないため、逃げ場がなくいじめが深刻化しやすい。

また、「いじめの4層構造論」では、いじめには加害者と被害者だけでなく、「観衆」や「傍観者」も関与しているとされる。これらの立場の生徒がいじめを容認しない姿勢をとることで、いじめの抑制につながると考えられる。

いじめの定義については、文部科学省の基準が「被害者がいじめられたと感じるかどうか」に重きを置いている点が特徴である。しかし、この基準では客観的な証拠が軽視され、冤罪が発生する可能性が指摘されている。

さらに、いじめによる自殺が社会問題となっており、遺書の解釈をめぐって「いじめの残酷さを示すもの」「自殺を美化すると模倣が増える」などがある。

教師の役割としては、いじめを個人の問題として扱うのではなく、学級全体の構造に目を向け、観衆や傍観者の意識を変えることが重要であるとされる。

P

私はいじめの未然防止について今回考えていきたいと思います。私はどんな場面でも誰にでもいじめが起こりうる可能性があるというのを知っておくということがまずいじめ未然防止にととても大切だと感じています。「あーこういう時にいじめが起こる場合があるって言うてたなあ」「こんな場面でこんなことに気をつけなきゃ」などと子供たちが生活をしていく中で少しでもいじめが起こってしまうというリスクについて考えられることはとても良いことです。その未然防止の対策として、日常の人間関係におけるいじめの場面やいじめかどうか曖昧な人間関係のモヤモヤ等をマンガ教材やアニメ教材にするということが有効ではないかと考えています。マンガ教材やアニメ教材にすることで子供たちでも場面のイメージがしやすかったり子供達も楽しく学習に取り組むことができたりと、アニメ教材やマンガ教材にすることはとても有効ないじめ未然防止の教育だなと感じるからです。またマンガやアニメにすることでセリフとして文字を起しをして第三者目線から日常の会話をみてみる機会にもなるため、普段は何気なくしてしまっている会話でも友達に嫌なことをしてしまっていることに気が付きやすいのでは無いかとかがえています。子供たちもいじめはいけないことだと理解している子がきつと大半です。しかしそのいじめが「無視」「暴力」などの大きな問題だけだと思ってしまう子も多いのではないのでしょうか。自分の発する言葉のひとつひとつにも人を傷つけてしまう可能性があるという点にも気が付かせることで友達との会話の際自分の発言に責任を持つということにも繋がっていくのだろうと感じ、より映像や漫画にすることは面白いのではないかと考えています。

私自身、小学校の頃に軽度ないじめに遭った経験があります。その経験からいじめ問題については元々興味がありました。そしてこの社会学で授業資料やレポートを作成したことを通してよりいじめ問題について考えるようにもなりました。私自身が受けていたいじめは仲間外れや無視、ものを奪われるなどのものです。これはハッキリといじめだと誰もが感じるものだと思います。しかし、よく考えてみるといじめか非いじめではないかの判断が難し

い場面に遭遇することが生きていく中でたくさんあることに気が付きます。私はいじめにあってきたという認識はありますが、いじめをしてきたという認識はありません。しかし自分の認知していないどこかの場面で周りの友達を傷つけてしまっているのではないかと少し不安になるような場面もあります。自分が嫌かどうかではなく相手が嫌に感じることはないか相手の立場になって考えることや友達同士でそのようなことが起こりそうな場合未然に防げるように声をかけるなど対策が必要だと思います。また教員になってからも教師間や、教師と生徒との立場で教師の方が上だという認識があるとモラルのない発言をしてしまう可能性があるのだと思います。体罰やセクハラなどに繋がらないように発言にはしっかりと気をつけていきたいです。また教師になるという観点からクラスの中でいじめが起こる可能性もあります。未然に防止できるものは防止していきたいですが、起こってしまうことは仕方の無い場合もあると感じます。日々の中でよく子供たちの言動や行動に目を凝らし少しの変化も見逃さずにキャッチしたいです。自分がいじめられていたときにすぐに声をかけ味方になってくれた担任の先生に救われたように、私も困っている子供たちに手を差し伸べられるそんな教師でありたいと思います。

## Q

私はこの講義を通して、ジェンダーと教育が1番印象に残っている。ネットやテレビなどでもジェンダーの自由を主張している人が多くいるため、だんだんと男と女という分別が無くなってきていると感じていた。とてもいい事だとは思う。しかし、どうしても男と女で分けなければいけない時、キリが良かったため男と女で分けてしまいたい時、どうすれば良いか悩みどころだと感じた。

例えば、先日子どもたちと小さなアクティビティをしたのだが、2つのグループに分かれて行う時、私はふと男女で分けてしまいそうになった。人数的にも、仲の良さ的にもその方が良かったからだ。そうすると、伝え方としては「男子と女子に分かれようかー！」となってしまう。私が子どもの頃はよくある言葉のひとつだったので、なんとも思わないが、今の時代はダメなのかと思い、少し悩んでしまった。その時は「仲よしグループに分かれよう！」と言い換えて言ってみたが、あまりしっくりせず、モヤモヤしたままだ。また、女の子の方が丁寧で男の子の方が少し雑なところがあるなど考えてしまった時もあった。勝手に自分の頭の中で男と女で区別してしまっているのだ。自分でもびっくりしたが、多くの人がこのように分けて考えていると思った。

性別を記入する欄もそうだ。男女で分けているところが多い。その他という欄あるところもあるが大きく括りすぎているのではないかと思った。

運動会でもそうだろう。女子と男子で分かれる種目もあり、力仕事が多い学校行事なのでまたそこでも男女で分かれることがある。

今の時代どのような対応をすればいいのか、どのように表現したら良いのか疑問に思った。また、ここまで慎重にならなくても良い事なのかとも思った。ジェンダーに悩んでいる子が

いるとは限らないため、過度に使いすぎず、過度に男女で対応を変えないというような、小さな注意を払えば良いのかと感じた。ネットにもジェンダーで悩んでいる人向けの動画やリールなどがあるので、教師がそこまで気をつけなくても子どもが自分自身で乗り越え解決するのではないかと思った。

## R

ジェンダーと教育の関係は、現代社会における重要な問題の一つです。学校教育は、子どもたちに知識を与える場であると同時に、社会的役割や価値観を学ぶ場でもあります。ジェンダーに基づく教育は、しばしば無意識のうちに性別による差別や役割分担を強化してしまうことがあります。例えば、教師が男の子には理数系の科目を得意とする傾向を期待し、女の子には文系を得意とするような偏見を持つことがあります。このような偏見が、学生の自己認識や進路選択に影響を与え、最終的には性別に基づく社会的格差を助長する可能性があります。

一方で、教育現場では性別にとらわれない教育が進んでおり、ジェンダーの平等を意識したカリキュラムの導入や、性別に関係なく多様なキャリア選択を尊重する取り組みが広がっています。しかし、依然として伝統的な性別役割意識が根強く残っており、これを打破するためには教育現場だけでなく、家庭や社会全体での意識改革が必要です。

ジェンダー平等を実現するためには、教育が性別に関係なく個々の才能を最大限に引き出す場であることが大切であり、そのためには教師自身が自らの偏見に気づき、意識的に取り組んでいくことが求められます。

## S

私に取り上げたテーマは第12回の「ジェンダーと教育」である。

はじめに、セックスとジェンダーの違いについて考えた。講義の資料ではセックスとは生物学的な性を指し、ジェンダーとは社会的に構築された性別と述べられていた。セックスは身体的特徴など指をされることがあり、ジェンダーは社会的役割や性の自認性などを指されることがある。私たちはこのセックスとジェンダーを分けて考え、ジェンダーアイデンティティを尊重していくことが重要であると考えた。

次に、学校における教育内容や授業での男女の違いについて考えた。私がこれまでに感じた学校における男女の違いはいくつかある。1つ目は体育の授業である。体育の授業では男女別の授業が行われることがあれば、体力測定の基準も異なることがあげられる。2つ目は職業選択の傾向である。敬愛短期大学では保育士を目指す学生が多く見られるが、女性の割合が圧倒的に多い。これは進路指導でこのような結果になったわけではないが、仕事の勧められやすさや、働き方が限られていることから、このような結果になっていることも考えられる。3つ目は制服の違いである。これは教育内容として、男子はズボン、女子はスカートというように決められていた。これは伝統的な影響が大きいと考えられる。これらの他にも

様々な男女の違いが見られる。これらの学校などの制度と向き合う際にも、セックスとジェンダーの違いを明確にし、個人の考えや希望を尊重していくことが重要だと考える。

次に、日本の学校で、男性教員と女性教員でキャリアの違いが生じるのは何故かについて考えた。これにはいくつかの理由が考えられる。出産や育児のために休職、時短勤務を選ぶ女性教員が多いことも1つの理由としてあげられる。長時間の勤務が教員は多いため、両立が難しかったり、どうしても女性の出産での負担が大きかったりすることが原因だと考えられる。また、校長先生は男性というような、ジェンダー意識があることも関係していると考えられる。

これらのことから、学校の中にはセックスとジェンダーを分けて考え、子どもや女性教員の意味を尊重する体制をさらに整えていく必要がある。また、男性にも期待されることから、生きづらいつと感じる場面が出てくることも考えられる。これらを解決していくためにはジェンダーとセックスの違いを理解し、子ども性別関係なく他者を認めていくことが必要であると考える。

## T

私が教育社会学の授業で一番印象に残った授業は、第12回で行われたジェンダーと教育という授業です。ジェンダーは、社会や文化によってつくられた男女の違いや役割のことであり、今では日本だけでなく世界でも注目されている問題だと思います。私がよく聞くのは、男女の格差や性別による差別です。ジェンダーがあることにより、教育の格差などが出来てしまうのだと思います。途上国では、女の子が学校に通えないことが多かったり、貧困家庭では、男の子の教育が優先されることもあるそうです。ジェンダーによる固定概念があることにより、生きづらさを感じてしまう人も出てきてしまうのではないかと思います。私が考えるジェンダーの固定概念は、男は青、女は赤などや、男は仕事、女は家事などといったものです。こういった固定概念のある考え方から、性別による男女差別や、女だから男だからと言った不平等などが起こってしまうのではないかと思います。今の時代、男女差別なく平等であることが一番大切なのではないかと思いますので、そういう固定概念に縛られた考え方はやめた方がいいのではないかと考えます。なので、私が将来教師になった時に、男だから女だからという教育は絶対にしたくないです。このジェンダーと教育という授業を通して、改めて男女差別について考えることが出来たので、とても印象に残っている授業です。

## U

「男も生きづらい」の記事が1番記憶に残っています。近年、男性の「しんどさ」や「生きづらさ」が語られるようになった背景には、社会のジェンダー観が変化してきたことが大きく関わっています。特に、女性の地位向上が進む中で、男性たちもまた新たな価値観に向き合わざるを得なくなっているのです。このような変化は、教育の分野にも大きな影響を及ぼしており、ジェンダー問題は学校や家庭における教育政策の見直し、そして社会全体の

教育意識を促しています。教育を通じて、ジェンダーについての議論を促進することが重要です。女性だけでなく男性が自身の感情や弱音を素直に表現できる場所を提供することは、彼ら自身の生きづらさを軽減するための第一歩となります。例えば、学校においては、男女の生徒が等しく意見を表明できる環境作りや、ジェンダーについての多様な視点を学ぶことが重要です。このような教育プログラムを通じて、子どもたちが性別に関わらず自分の意見や感情を自由に表現できる力を身につけることができます。

また、男性同士の語り合いの場を持つことが促される中で、彼らの感情の共有が進むと同時に、女性の声に耳を傾けることの重要性も忘れてはなりません。男女のコミュニケーションが活発になれば、相互理解が深まり、ジェンダー平等の実現につながります。これは、教育機関におけるライフスキル教育や社会教育の一環として位置付けられるべきです。さらに、男性たちは自らの「しんどさ」を認識し、この感情が女性に対する暴力や差別といった問題ともつながることを理解する姿勢が大切です。このように、ジェンダー問題は個人の生きづらさに留まらず、社会全体における不平等を解消するためのひとつの鍵であると言えます。男女が対等に協力し合うことで、より良い社会を作り上げていくために何が必要かを考えることが求められています。結論として、教育はジェンダー問題において核心的な役割を担っており、男性の生きづらさを軽減する取り組みの一環として、オープンな対話と多様な価値観の受容を促進すべきです。そして、そうした努力は、結果的に社会全体のジェンダー平等に近づくけると確信しています。

## V

このテーマを「教員の児童生徒に対する愛と情熱」にする。

教育社会学のなかでも様々な教師の対応、教育を見てきた。一番印象に残っているのは、「教育と差別」で児童に対して差別を言葉として説明するのではなく、実際に体験してみる。という教育方法だった。賛否両論ではあったが、今にはない愛や教育に対する情熱があるからこそできることだとそれを見て思った。

今回、このテーマから考えたいことは、現代に合った教育方法とその課題についてである。上記の例以外にも、私が注目したい教師がいる。それは、「アン・サリバン」という教師だ。サリバン先生はあの有名なヘレン・ケラーの家庭教師だった。ヘレンは、幼少時に髄膜炎にかかり、視覚と聴覚を失った。「奇跡の人 2000」という映画では、そんなヘレンに言葉を教えるサリバン先生の教育に対する情熱を感じることができる。作中、ヘレンの両親は甘やかしてばかりで、ヘレンは傲慢で思い通りにいかないと暴れるような子だった。教育を行う中では、ヘレンに殴られ殴り返すシーンや少し強引な教育が見受けられる。しかし、その強引ともいえるやり方がうまくいき、ヘレンに言葉のある世界を与えることになる。何も見えないはずの真っ暗な世界に、光をともしたのがサリバン先生だった。わたしは「殴られたから、ヘレンはサリバン先生のことを嫌いになるのではないか」と考えていたが違った。文字と意味がつながった瞬間、ヘレンは「もっと教えて先生！」というよ

うにサリバン先生の袖を引っ張った。

現代の教育では、体罰と言って昔よりも厳しくなり過度な教育はできなくなった。そうすることで子どもが怖い思いをすることがなく勉強することができるからだ。しかし、そうすることで教師がのびのびと教育することができないのではないか。また、何も怖い思いをせずに、本当に学べるのか。人は、失敗から学ぶ。大きな失敗をしないためにも、小さな失敗から学ぶ必要があると思う。今の教育がすべて悪いわけではないが、教育の本質から目を背けないでほしい。勉強をさせるというよりは、学校では学習やコミュニケーション、ルール等によって人間形成を行う。それが、学校の役割だと考える。ただ教師が、言葉で「これはダメよ」と説明するのと、差別の例のようになぜダメか、この立場に立った時どう思ったかを体験させるのでは、学びの深さが段違いである。

私は、児童や教育に対しての情熱や愛をもち、よりよい教育をしていきたい。そのためには、今もこれからも答えが難しいこの課題について考え続ける必要がある。学習の本質から目を背けず、課題に対して必死に噛みついて、自分なりの教育方法を確立していきたいと考える。

## W

「現代の教育課題を読み解く」第7章小4教育の改革と小中一貫教育より、発達課題上の問題の多い小学校4年生の教育指導を考えたとき、現行の義務教育制度の6・3制の制度改革が必要であることが分かる。小中9年間で4・3・2のくくりで学校を運営する「小中一貫教育校」（義務教育学校）への転換を図ることで、小学校4年生を低学年部の最高学年と位置づけ、充実した教員の指導体制を構築することができる。小中一貫教育4・3・2により、急激に増加してきているさまざまな教育問題（不登校、いじめ、中一ギャップ等）の改善をはかることができることが読み取れる。

以上のことから、小学校文化と中学校文化が融合することにより、小学校・中学校の単独の教育発動より幅広く、質の高い教育実践ができることが分かる。小学校4年生の教育環境を改善することで、現在の様々な教育課題解決に繋げようとの提案をするとともに、小中一貫教育という学制改革の必要性を強く感じる。戦後導入した「6・3・3・4制」を真摯に見直し、情報革命期とも称される中で、抜本的な教育改革を学校制度の改革の視点から様々な教育課題解決の方策を模索する必要性がある。

## X

私は武内先生のhpから「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰（こ）えず」というテーマを設定しました。

「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」という言葉は、論語の中で孔子が述べた名言です。この言葉は、年齢を重ねた者が、欲望に流されず、道徳的な規範に従い続けるべきだという教えを表しています。具体的には、70歳を過ぎた者は、自己の欲望に従って生き

るのではなく、社会的なルールや道徳的な規範に従うことが重要だと説いています。本稿では、この言葉を深く考察し、現代社会における意味や適用について論じます。

「心の欲する所に従いて矩を踰えず」という部分は、「心が望むことに従って行動するが、道徳的な枠組みを超えない」という意味です。孔子は、年齢を重ねることで、欲望や衝動に流されず、社会の規範を守り続けることの大切さを強調しています。矩（かた）は「規範」や「道理」を意味し、これを超えてしまうことは、道徳的な逸脱を意味します。この教えは、年齢を重ねることによって、内面的な成熟や道徳的な自律が求められるという孔子の思想を反映しています。

現代社会においても、この教えは非常に重要な意味を持っています。現代では、欲望を満たすために個人の自由が優先されがちですが、その中で社会的な責任や倫理を守ることが求められます。特に、年齢を重ねた人々には、経験や知識を元に社会のルールや倫理を尊重することが期待されています。

例えば、企業の経営者や政治家、教育者など、社会的責任を担う立場にある人々は、その行動が社会に与える影響が大きいため、道徳的な規範を守ることが重要です。年齢を重ねることによって、知識や経験は豊富になりますが、その反面、自己中心的な欲望に流されることなく、社会の利益を考える冷静さが求められます。この点で、孔子の教えは現代にも当てはまります。

「七十にして」という年齢は、単に年齢を示すだけでなく、長い人生を経て到達すべき成熟の段階を象徴しています。70歳という年齢は、人生の後半であり、これまでの経験を活かして、社会に貢献することが期待される時期でもあります。孔子は、年齢を重ねることで人は成熟し、欲望に流されることなく、社会の規範を守るべきだと考えたのです。この年齢に至るまでに培った経験や知恵を、社会のために生かし、自己中心的な行動を避けることが求められます。

現代でも、定年を迎えた後の人生や、リタイア後の社会貢献が重要視されているように、年齢を重ねることは新たな社会的責任を担う機会でもあります。孔子の言葉は、年齢に応じた社会的な自覚を持ち、道徳的な規範に従うことの重要性を説いているのです。

「心の欲する所に従いて矩を踰えず」の言葉は、欲望と道徳のバランスを取るための大切さを教えています。欲望自体が悪いわけではなく、過度に欲望に従って行動することが問題なのです。現代社会では、物質的な成功や個人の自由が強調される一方で、倫理や道徳が軽視されがちです。しかし、社会全体が調和を保つためには、個人の欲望と道徳的な規範のバランスが重要です。

特に高齢者は、自己の欲望に流されることなく、社会的な義務や責任を果たすべき立場にあります。高齢者が道徳的な規範に従い、社会に貢献することは、若い世代への良い模範となり、社会全体の調和を保つことに繋がります。

「七十にして心の欲する所に従いて矩を踰えず」の言葉は、年齢を重ねた者に対して、道徳的な自律を求める孔子の深い教えを示しています。現代社会においても、欲望に流されず



社会的責任を果たすことは重要であり、年齢を重ねた者には、その知恵と経験を社会のために活かすことが求められています。孔子の教えは、現代においても多くの人々にとって、道徳的な指針となるべきものです。